

詩

石内秀典
尾崎与里子
山本英子
選

特選

お誕生日、おめでとう

吉田 真梨子

花いちもんめの輪の中で

みんな、「序列」をすでに知っていた

選ばれない私が生まれ、物語は完成する

みんな、知っていた

選ばれない人が生まれると

選ばれる人も生まれるということ

みんな、知っていた

私は愚鈍で気づけなかった

いや、気づかないふりをしていた

大人になっても「輪」がある限り

花いちもんめは形を変えて繰り返し返される

私は「輪」を離れることにした

「あなたがほしい」

「相談しましょう」

「そうしましょう」

遠くから聞こえてくる

その一言を

わたしなりの解釈で、わたし自身を連れて

わたしの速度で追い求めることにした

——お誕生日、おめでとう

新しい「わたし」の誕生です

薄明のなかで、「圏外」という

極上のケーキを食しましょう

お誕生日、おめでとう

(評)

たしかに人が集まれば必ず現れる輪。その輪を離れて生きていく難しさを超えて、自身をふるいたたせていく作者の意志を明確にした姿がすがすがしい。知的な表現が芯にある。

特選

ハルシネーション

叶 葉 湖

月はチーズでできている
命は星の欠片でできている
あなたはこれまでに心を動かされた言葉と
読み返してきた本の記憶でできている

(評)

AIなくしてもはや私たちの生活が成り立たない時代になって来た。このような虚実不可分の世界で今後言葉や詩がどのようになりたつか。この作品はその試みを提示して一つの世界を垣間見せてくれた。これからの問題提起をして新鮮。

(ハルシネーション…生成AIが事実に基づかない情報をあたかも根拠があるかのように出力する現象)

時計の針だけがぐるぐると回り続けて
写真の中の私は水分の抜けたネーブル
物事の本質について探求する旅は
砂漠に水を撒くようなものなのでもうやめた
ゴールテープのない地平線の上を
あてもなく歩き続けていると
そのうちにわかってきた
ユーモアといとしき嘘
ハルシネーションを許容する明るさが
世の中には必要だってこと

すずらんは聖母の涙でできている
記憶は過去の光の残像でできている
隣人は謎と孤独でできている
切りくずとカタツムリでできている子犬は
今夜チーズでできた月を食べる夢をみる

入選

白もくれん

高 井 豊

今朝 三つ咲いていた白もくれんが
午後には七つに増えている
白い花は心のかたちをして
年を重ねるごとに高みへと咲いていく

ひたむきに見あげる心
見えない風にもほころぶ心
驚いてやわらかくなる心
待つことでふくらむ心

私が見てきた淋しさは
葉になつてあとから出てくるのだろうか
花はいちにち ゆつたりと
やさしさばかりをひらいている

(評)

なにげない優しい書き出しから二連目の非凡な心の表現そして終連のかすかな心のにがさへつづく。表現は優しいが完成された作品。

入選

通い道

前川利孝

我が家の近くの山城へ向かう坂道
折にふれ同じ道を登るのは
忘れてしまった何かを
探しに行くためではなく
失くしたくない自分を
確かめに行くため

汗にまみれた坂道は
遠い日の小学校の校庭と繋がる
鉄棒の冷たさに震え
毎夕逆上がりに挑んだあの夕暮れ
誰にも見せなかった悔しさと
独りでつかみとった克服の喜びは
今もこの胸の奥で脈打っている

高台から見下ろせば
あの頃友だちと駆け抜けた運動場と
その先には今日迄を守り抜いてくれた
我が家の静かな屋根がかすむ

中世にはこの山城が
この辺りを統括していたようだ
かつての侍たちが踏みしめて敵と戦った
土の感触を足の裏で確かめながら
私は館の跡地を静かに廻る

佳作

仏像を彫る

疋田浩二

登りきった場所を感じた
頬をかすめる風は
幼き日々の自分への祝福と
明日を生きるための静かな誇りの感覚だ
自分という名の城を守るために
何度か繰り返ししてきたこの山城巡り
原点を確かめて私は安どを取り戻す

佳作

茶わん市

松本トシ子

(評) ひそかな自分の城への道を、心をこめて巡って
いく作者。膨大な生の歴史を振り返りながら
確かめ、たしかめつつ自分の位置を確認してい
く。作者の個人の思いは普遍性を持つだろう。

《総評》

昨年話題になった本『僕は鳥の言葉がわかる』を面白く読んだ。動物言語学者を名乗る若い先生の本だ。彼は根気強いフィールドワークと緻密な研究の末にシジュウカラがシジュウカラ語と称する「言葉」をもつことを突き止めた。鳥は種類の違ったさえずりをして何かを仲間に伝える。恐らくすべての鳥は「言葉」を持っていると思う。しかし鳥はいまだ書く術を知らない。

原初人間も声で何かを伝えていただろう。そしていつか言語をもつようになり、そして書くことを知った。その言葉の起源は世界中の言語学者をもつてしても結局不明のままだが……。なぜか私は、たとえばむせ返るような新緑をまえにするとその深い緑の匂いを言葉にし、人に伝えたいと思う。人は言葉を持ち書くという力を持った瞬間から自分の思いを人に伝えようとした。詩が始まる瞬間だろうか。

AIで私の詩は書けるか。その問いにわたしはこう思っている。私にとつての詩は、深い記憶との対話の中から生まれてくるものと思っている。熾のような記憶と言葉が交わる時に詩は生まれるものと考え故にAIでは行き着けない領域がきつとあると考えている。

石 内 秀 典

選者吟

赤い郵便車

石 内 秀 典

昨年の秋
刈り取りの済んだ
田の畔を
彼岸花の赤い一列が
誇らしげに行進していた

私の膨大な記憶の淵から
流れ出そうとするさまざまの影を
郵便車が運んできた手書きの便りが
いつも
包んでくれた

年が変わるや
田の土は黒々と掘り返され
重機は高い音をたてて
威嚇しながら行進する
砂利がまかれ瞬く間に平坦な土地に区画され
街が出来るらしい

このたんぽにできた街を走る
赤いボックスを積んだオートバイは
おとぎ話の
なつかしさだ

おそらく黒くて四角い家々がたつだろう
角張った街が

田圃のなかに又一つ生まれる

街が始まるには郵便番号が付され
郵便車が来なければならぬ
便りが手から手へ届けられて
初めて生活が始まるのだ

節分

尾崎 与里子

鬼はいつも

胸のあたりに棲んでいるようだった

まなじりや口端を歪ませて

深く人の心の中に分け入り

硝子の欠片を裸足で踏みしだき

私たちは愚かなまま為す術もない

節分

私たちは炒り豆を撒き 鬼を打ち叩く

こぼれた豆は

口に含むと

ふくいくと懐かしい香りがして

振れる罪は捨てきれず

どこまでも人を惑わし

コウフクナヒト ザンギヤクナヒト

ブツカルヒト キライナヒト

コウチナヒト ヨワイヒト

ミンナ タオレテウメキマスヨウニ

千匹の老黄牛を埋め固めた土の

それでもどこかひとところから

毎年 強い鬼の芽が吹き出て

風を起こし 激しい渦を作り

人を引き寄せ 巻き込み なぎ倒し

オニハソト フクハウチ

それはかなしみであるために

山 本 英 子

それはかなしみであるために
いつまでも

かなしみつづけて

ゆくほかはない

とおくハイウェイをゆくトラック

ゆつくりとむこうからこちらにくる母